

「インディアン・キャンプ」をめぐる帝国の欲望

アーネスト・ヘミングウェイ初期の短編「インディアン・キャンプ」は、これまでヘミングウェイ作品の中でもっとも頻繁に論じられてきた作品のひとつである。物語はヘミングウェイの半自伝的登場人物であるニック・アダムズの目を通して語られる。まだ幼いニックは父親のヘンリー・アダムズ医師と叔父のジョージに連れられ、森でキャンプをしていたが、突然インディアン¹女性の出産を手助けするためにインディアン・キャンプに赴くことになる。その女性は子供を産むことができずに二日間も悲鳴を上げ続けていた。アダムズ医師はその子供が逆子であることを知ると、麻酔をかけることなくジャックナイフで帝王切開を行い、釣り用の針と糸で傷口を縫い合わせるという、非人間的な状況下での手術を何とか成功させる。母子ともに命を救うことのできた医師は、得意げになつて隣で寝ていた夫に知らせようとするが、その時すでに夫は剃刀で喉をかき切つて自殺していた。ニックにそのような場面を見せてしまったことに意気消沈し、医師はニックを連れて早朝の湖をボートで帰っていく。その時ニックは突然、自分は決して死なないのだという確信を抱く。

この作品が多くくの批評家の関心を集めてきたのは、ひとつには「インディアン・キャンプ」にはいくつかの解きがたい謎が潜んでいるためであろう²。批評家たちの意見がもっとも分かれているのが、物語の最後でニックが抱

く、自分は決して死なないという確信である。これまで伝統的にこの作品はニックのイニシエーションの物語であると捉えられてきたが、作品最後のニックの確信に対する解釈はおおむねニックのイニシエーションが失敗に終わったのだとする解釈と、成功したとする解釈の二つに分かれる。前者の意見によれば、ひとりの人間の命が暴力的に絶たれたのを目の当たりにして、なおかつ死なないことを確信するのは現実から目をそらしているからだということになる（「非現実的げ子どもっぽく」【DeFalco: 32】、「子どもらしい幻想」【Griffin: 68】、「希望に基づいた、自己防衛的な」【Spilka: 194】）。その一方で後者の意見によれば、ニックの死なないという確信はなんらかの条件に限定されたものであり、ニックの通過儀礼は果たされたと考えられる（「いくぶん子どもらしい非現実的な不死の感覚であるが、この主張は決意でもあるのだ。（中略）彼は自分が決して死なないだろうと決意するのだ。なぜなら自分が自殺をすることはないと確信しているからである。彼は失意の父親が死んだようには決して死なないだろう、と考えているのだ」【Monteiro: 154】、「早朝に、かつ湖の上で、かつボートの船尾に腰掛けて、かつ父親が漕いでいるときにだけ、ニックは「自分は決して死なないだろうとすっ、かり、確信」することができるのだ」【Smith: 39】）。

この作品にはもうひとつ、これと同じくらい重要な謎が存在することを、ジェフリー・マイヤーズは一九八八年の論文で指摘した。これまで批評家たちは当惑を感じながらもインディアン¹の夫がなぜ自殺したのかということについては十分な説明をすることができなかった。従来はアダムズ医師の説明（「彼は耐えられなかったんだと思うよ」【Hemingway: 69】）から、妻の上げる悲鳴を聞いているのに耐えられなくなったのだと解釈されてきた。確かに母

親は麻酔のない状況で激しい苦痛を経験したはずであり、それを見続けるのは苦痛であろうが、母子ともに助かった以上、妻の苦痛に対する反応としてはあまりにも極端すぎるように見えるのである。マイヤーズはこの謎を作品解釈をする上で中心的な問題であると考え、「なぜ夫は妻が二日間も叫び続けていた間小屋の寝台にとどまり続けたのか、妻の苦悶に満ちた痛みと悲鳴に耐えられなかったのなら、なぜ部屋を立ち去らなかったのか」[Meyers: 211]を解き明かそうとするのである。

本論考はこの二つの謎のうち、特に後者を中心的に論じ、その過程でこの作品をめぐる帝国主義的イデオロギーの問題を考察する。作品が書かれた一九二〇年代は帝国主義的拡大政策を続ける米国が第一次世界大戦で戦勝国になることで、国際的に主導的な役割を果たし始めた時期であり、そういった外交政策を支えたイデオロギーは、当時書かれた作品に色濃く反映されていた。一見、非政治的に見える「インディアン・キャンプ」もその例外ではなく、上に述べた作品に含まれるさまざまな謎も、単に美学的問題としてのみ考えるわけにはいかないのである。

また、帝国の欲望は作品解釈にも現れる。「インディアン・キャンプ」はすでに述べたように、これまで頻繁に論じられてきた作品であるが、特に二〇世紀後半の批評でこの作品がどのように扱われているかを見ることで、作品が書かれた時代の帝国の欲望がそのまま姿を変えて再演されていることを明らかにする。二一世紀の今日、我々はこれ以上「インディアン・キャンプ」に秘められた帝国主義的なイデオロギーを再生産するわけにはいかないのである。

まずは「未開」のインディアン・キャンプにやってきた白人医師の行う治療がどのようなものであるかを見てみたい。患者の苦しみを前にして、アダムズ医師は息子のニックに淡々と「医学的説明」を加えていく。

「このご婦人は子供を産もうとしているんだよ、ニック」と彼は言った。

「分かってるよ」とニックは言った。

「分かってないよ」と父親は言った。「聞きなさい。この女性が今経験しているのは分娩と呼ばれるものだ。

赤ん坊が生まれたがっついて、彼女も生まれてほしいと思っっているんだ。筋肉をすべて使って何とか赤ん坊を生もうとしている。彼女が悲鳴を上げるときに起こっているのはそういう状態なんだ」

ちやうどその時、女性が悲鳴を上げた。

「ねえパパ、何かあげて悲鳴を止めてやることはできないの？」とニックは聞いた。

「いや。麻酔を持っていないんだ」と父親は言った。「しかし彼女の悲鳴は重要ではないんだ。重要ではない

から私には聞こえないよ」【Hemingway: 68】

医師が女性の痛みに対して無関心なのは、近代医学の身体観が典型的な機能主義ファンクショナルイズムに基づいているからである。そういう機能主義的観点から見る限り、インディアンの女性が悲鳴を上げるのは分娩を促そうとして筋肉をより柔

軟にするためであり、出産のための正常な身体メカニズムにすぎないのだ。痛みや苦しみのためではなく、単に自然な生理学的現象なのであるから、「彼女の悲鳴は重要ではない」のである。

しかしこの作品で繰り返し描かれる、医者对患者に対する無配慮と、痛みに対する無関心は、単にこのような医学的身体観を描き出すものというよりはむしろ、それ以上にアダムズ医師の人種的偏見をあぶり出しているように見える。患者であるインディアン（インディアン）の女性を常に「（インディアン）婦人」(lady)と呼び、一見敬意を示しているように見えながらも、自分の幼い息子に出産を「見学」させ、父親としての威厳を示そうとするかのような俗物的な態度は、患者が白人であればおそらくありえなかったであろう。設備の整っていない状態で困難な手術をやったのけ、母子の生命を救ったことは確かに賞賛に値すべき功績であったかもしれないが、その困難な手術を麻酔なしで耐え抜いた患者に対してまったく配慮しようとせず、「これは医学雑誌ものだぞ」と浮かれて自分の手柄を自慢している様子はむしろ醜悪ですらある。おそらくこの医者は、自分でも気づかぬうちに患者がネイティブ・アメリカンであることを念頭に置き、そのために患者の痛みに対して共感できなくなっているのだ。

それは当時アメリカでプリミティブイズム原始主義が流行していたことを反映している。様々なメディアで喧伝されていた原始主義では、痛みの感覚とはそもそも文明世界の便利さに甘んじているために生じたもので、「未開民族」には痛みの感覚はないと信じられていた。その結果、「痛みを感じないインディアン」の伝説がまことしやかに流布され、賞賛の対象となっていたのである³。墮落した文明世界の悪影響から免れた原始的な「未開民族」の純粹さを表向き賞賛し

ながら、結局は彼らを「他者」として囲い込み、自らの文化的優越を示すという点で、この原始主義は単なる人種的偏見の裏返しにすぎない。凶暴で野性的で、動物的身体能力が高いといった、自分たちの中に認めたくない側面を、自らの文明的生活に対する対立概念として、「遅れた」民族に押しつけているのである。いわば自分たちは進歩的な生活を獲得した代償を払っているのだと主張することで、逆説的に自らの文化的優位を主張しているのである。

こういった原始主義は、当時世界中の列強を植民地獲得へと駆り立てていた帝国主義の欲望が生んだ副産物である。第一次世界大戦以後ますます大国としての地位を確立しつつあった米国もまた、自分たちが紛れもなく米国人であるというアイデンティティを確たるものとするため、ネイティブ・アメリカンを後進的な民族と規定し、米国の構成要素から彼らを除外する必要があったのだ。文化的他者を否定することによってアイデンティティを確立するこの方法を、ヘイドン・ホワイトは「否定による直示的自己定義のテクニク」(“the technique of ostensive self-definition by negation”)と呼んでいる。

社会文化的に緊迫した時代に、肯定的に自己定義をする必要が生じながらも、自分を定義するための説得力のあるよりどころが見つからない場合、常にこんな風ない方をする^{ヒューマニティ}ことが可能である。「自分自身の人間性に関してのはつきりと分かっていないかもしれないが、間違いなく言えるのは自分はある風ではない」ということだ」、そうやって辺りを見回し、自分たちとは明らかに違うものを指し示すだけでよいのだ。[White: 151]

第一次世界大戦を終え、次の大戦に向かいつつある時代にあつて、帝国の欲望に取り憑かれた米国は、原始主義の名を借りながら「自分たちとは明らかに違う」後進的な民族を捜し求めていたのだ。

医学の言説もまた、この否定的自己規定を再生産し続けた。「痛みを感じないインディアン」の伝説は、科学的客観性の名の下に「立証」されていた。したがって当然医学的にはネイティブ・アメリカンの出産には痛みが伴わないとされたのだ。以下の引用は、米国での出産の歴史研究の一節であり、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての出産の手引きについて説明している。

痛みのない出産のもうひとつのよくある説明は、おなじみのインディアン女の話である。インディアン女は文明の害を受けていない自然児なので、妊娠には特別な注意や心配をする必要はないし、出産直前まで普段の雑用をこなすのだ。

しかしインディアン女性は両刃のシンボルである。あらゆる手引きが指し示しているのは、「文明」が出産の際の恐ろしい痛みを感じる原因であり、インディアン女性はそれ以前の、自然の中での原始的な状態における出産の実例なのだということである。しかし痛みを感じなかった女性は、痛みを感じた隣人たちよりも文明化されていないという非難を被る可能性にさらされていたのだ。なぜなら痛みは文明の代償であっただけでは

なく、不幸にして進歩のしるしであり、産業化以前の社会でしなくてはならなかった雑用から免れたことのあるしであつたからだ。[Wertz and Wertz: 113-14]

「インディアン・キャンプ」のアダムズ医師が、患者の痛みは無頓着であつたことに、このようなイデオロギー的な背景が影響していたことは間違いないだろう。いわば帝国の欲望が、民族的他者の痛みを覆い隠しているのである。

ネイティブ・アメリカンの痛みを軽視していたアダムズ医師は、この後麻酔なしで帝王切開手術を行うことをためらわない。ユルゲン・C・ウォルターは、帝王切開 (Caesarean) という言葉そのものが「単に外科の専門用語であるだけでなく、権威、帝国主義、権力の掌握、専制的独裁を暗に意味している」と述べている [Wolter: 92]。こういったことを考えても、この作品で帝王切開が指し示す権力構造は植民地主義のそれに酷似していると言えるだろう。つまり支配者の残忍さが概念上、被支配者に転嫁され、残忍であるとされる「野蛮人」こそがしばしば文明の名の下に行使される残忍さの犠牲となるのである。痛みを感じないとされるインディアン女性の身体は、「未開」である自然の領域を侵犯する白人たちによって切り裂かれ、蹂躪されるのである。

このように考えてみると、作品出版当時、急激に発展しつつあつた医学のテクノロジーがこの作品に現れてこないのにも理由がありそうである。そもそもニックたちは釣りをしに森でキャンプをしていたところを、女性の出産

を手助けするために近くのインディアン部落へと呼ばれた。したがって最先端の医療機器を持ち込めないのは当然のことである。しかしこの作品における「麻酔の不在」には、患者の置かれた地理的条件という問題以上に、より深い意味が込められていそうである。つまり、麻酔とはそもそも「文明化された人種」を対象にして発明されたものだからである。「麻酔」(anesthesia)という言葉を考え出したオリヴァー・ウエンデル・ホームズは、麻酔技術の発明者とされているウィリアム・T・G・モートンに宛てた手紙で次のように述べている。

その状態は「麻酔」と呼ばれるべきだと思う。この言葉は無感覚を、もつとはつきり言えば(中略)触れる対象に対する無感覚を意味している。(中略)

早いうちに呼び名がほしいのだ。そして(中略)一流の学者に相談して人類のあらゆる文明化された人種の口で繰り返されるような言葉に落ち着きたいものだ。[Warren: 79]

強調部分に明らかかなように、麻酔がネイティブ・アメリカンに使用される可能性など、そもそもホームズの頭にはまるでなかったであろう。麻酔とは「人類のあらゆる文明化された人種」のためのものであり、その「人類のあらゆる文明化された人種」の中にネイティブ・アメリカンは含まれていなかったのである。

このインディアン女性の出産と『武器よさらば』のキャサリンの出産とを見比べてみると、より一層ヘミングウ

エイの思考におけるテクノロジーの占める位置がはっきりとしてくる。キャサリンもインディアンの女性も帝王切開手術を受けることになるが、前者の場合は最新の設備の整ったスイスの病院で手厚い看護をうけながら、手術以前の陣痛の段階から麻酔漬けにされるのである。ここでは彼女の痛みは何をおいても抑えつけ、コントロールし、そして取り除かなければならないものなのである。

ステイヴン・カーンによると、麻酔が発明され、痛みを取り除く可能性をいったん知ってしまった以来、白人はもはやそれまでと同じように痛みに耐えることができなくなったという [Ken: 78]。未開の地で適切な設備のない状態で手術を受けたインディアンの女性ではなく、医療機器のそろった中で手厚く看護されたキャサリンの方が死んでしまうという結末は皮肉ではあるが、この二つの手術の間に横たわる大きな差異の背後には、無意識のうちに抱かれた人種的ステレオタイプの構図が潜んでいるのである。その構図において、白人は痛みに敏感で耐性がなく、インディアンの身体はたんに生命を維持するために機械的に機能するシステムに過ぎず、したがって身体的痛みはさほど重要ではない、医者側の考慮に入れる必要のない要素と考えられるのである。このように考えてくると、自己の痛みを鮮鋭にし、他者の痛みを不可視にするという点で、麻酔とは帝国の欲望を体現するテクノロジーであると言えるだろう。

アダムズ医師に批判的な目を向けるヘミングウェイは、おそらくこの西洋人に特有の、他者の痛み鈍感で自己の痛み敏感な「麻酔の認識論」にある程度気づいていたのだろう。おそらくヘミングウェイが「インディアン・

キャンペーン」で描こうとしたのは、この麻酔の認識論とは正反対とも言える「自然崇拜」と呼ばれるネイティブ・アメリカンの世界観である。二〇世紀初頭、ネイティブ・アメリカンは自己と他者の区別が限りなく曖昧であると信じられていた。

「自然崇拜とは」自然世界と深く一体化し、人の命をその自然の一部であると信じ、したがって宇宙の秩序が道徳的に正しいかどうか疑問を差し挟んだりはしない、そのような知覚と思考の様式である。一步下がって自分たちの生を眺めるようなやり方はしないし、できないのである。[Bell: 11]

人間の生命がすべて自然の一部であり、同じ自然の一部である他者と自己との区別がそもそもない。これは先に述べた西洋の世界認識とは大きく異なっていると言えるだろう。

文化人類学に造詣が深く、ネイティブ・アメリカンに関しても多くの資料を収集していたヘミングウェイは、当然広く知られていたこの概念を知っていたはずである。そしてこの概念を前提とすると、「インディアン・キャンペーン」という作品はこれまでとは少し違って見えてくるはずである。本論考の冒頭で、インディアンの夫が妻の悲鳴に耐えきれずに自殺したという解釈に、ジェフリー・マイヤーズが疑問を呈したことに触れた。インディアンの夫は脚を怪我して妻のすぐ上の寝台に横たわっているのだが、「たとえ脚をひどく負傷していても、そうしたければ足を引

きずりながらも、あるいは運び出してもらうことで悲鳴の聞こえない場所まで行くことはできたはずだ」[Meyers: 211]とマイヤーズは述べる。しかしこの夫が自己と他者の区別が曖昧なネイティブ・アメリカンであることを考慮に入れれば、マイヤーズは根本的に的はずれの指摘をしているのではないだろうか。ジャックナイフで腹を切り裂かれ、そこを釣り用の針と糸で縫い合わされるといふ暴力的な手術を見ながら、その痛みを「他者」の痛みではなく、自分の痛みとして感じていたのなら、そもそも「悲鳴の聞こえない場所まで行く」ことなど考えなかったはずである。この時彼の妻が経験していた痛みは、自分のものとして捉えるにはあまりにも激しすぎるものであったはずだ。したがってその痛みを自分の生命を絶つことで止めようとするのはさほど「極端な反応」とは言えないのではないだろうか。

マイヤーズはインディアンの夫の死を「擬婉」という概念を用いて説明しようとする。擬婉とは「男が儀式として妊娠の兆候や出産の際のうめき声を模倣する」ことであり、マイヤーズは白人たちが擬婉の儀式に侵入することによって「妻の純潔が汚されることに耐えられなかったのであり、そのことのほうが悲鳴よりもはるかに我慢ならなかったのだ」と結論づける [Meyers: 217, 219]。白人が儀式に入り込むことが妻の悲鳴よりも耐え難いことだとするマイヤーズの指摘は、文化人類学的知識をあまりにも機械的に適用した結果である。擬婉という儀式は単にそのコミュニティの構成員が盲目的に従う儀式などではなく、実際の日常生活において妻の感じる痛みに共感することから生まれたものである。擬婉の際に男性が実際に物理的痛みを感じる場合があるという報告も存在している

【Morse and Micham: 652】。単に儀式の場に侵入されたから自殺したという説明は、あまりにも彼らの儀式を不可解なものとして外面的に捉えていると言えるだろう。

西洋的に自己と他者をはっきりと区別し、ネイティブ・アメリカンの痛みの共有を理解していなければ、インディアンの夫の自殺は大きな謎と見えるだろう。だからこそマイヤーズはその謎の背景に、それと同じくらい謎めいた理由——未開人の理解不能な儀式——が必要だったのだ。ネイティブ・アメリカンの儀式はマイヤーズにとって、理解（共有）されるものではなく、単に発見され、名前を付けられ、分類されるもの、すなわち文化的他者の不合理さを表す表象でしかないのだ。

マイヤーズやマイヤーズに賛同する他の批評家たちは、インディアンの夫の自殺があまりにも「極端な反応」であると考えるが、そのような読み方をすればアダムズ医師と同様の帝国の欲望を再演していることにはかならない。彼ら西洋の批評家たちは、ここに描かれるインディアンの夫婦が西洋人であったとしても同じように「極端な反応」であると考えたであろうか。「インディアン・キャンプ」に描かれる声なきインディアンたちが彼らにとって文化的他者でしかないために、他者の痛みにあまりにも鈍感になっているのである。インディアンの夫の自殺を「謎」であると考え、その「謎」に西洋の合理的説明を加えることは、アダムズ医師を批判的に描いたヘミングウェイの意図を完全に誤読することにつながるのである。

このように見てくると、これまでもっとも批評家たちを悩ませてきたラストシーンも少し違って見えてくるはず

である。ニックは一晚のうちに、新しい命の誕生と父親の自殺が同時に起こるといふ、生と死が暴力的に結びついた場面を目撃することになった。夜が明けて父親とともにボートに座り、ニックは周囲の自然と限りない一体感を感じながら、問題となる不死の確信を抱くのである。

彼らはボートに座っていた。ニックは船尾に腰掛け、父親が漕いでいた。太陽が丘の上にまで昇ってきた。バスが飛び跳ね、水の中で輪を描いた。ニックは水に手を漂わせてみた。朝の刺すような冷気の中で、水は温かく感じられた。

早朝の湖で、父親の漕ぐボートの船尾に座りながら、彼は自分が決して死なないとすっかり確信していた。

[Hemingway: 70]

ここに描かれているのは、ネイティブ・アメリカンの自然崇拜に非常に近い感覚である。早朝の冷気のせいで暖かく感じられる湖水に手を浸すことで、ニックの身体は周囲の自然と融合し、自他の区別が溶解していくかのような印象を読者に与える。そしてその自然の中では生と死の循環は永遠に繰り返されるのである。したがって自然と一体化したニックがここで決して死なないと確信しているのは、自らの一回限りの生のことを言っているのではなく、永遠に続く生命の再生のことを言っているのである⁴。

マイヤーズはネイティブ・アメリカンの儀式を表面的にしか捉えることができず、あくまで描かれたネイティブ・アメリカンを「他者」としてしか認識できない。その一方でヘミングウェイは、自らの分身とも言える主人公ニックに、ネイティブ・アメリカンの自然崇拜を体験させているのである。私はここで、ヘミングウェイが当時の支配的イデオロギーによって捏造されたネイティブ・アメリカン像を乗り越えていくと主張したいのではない。自然崇拜という概念自体もまた、西洋の学問体系による他者表象にすぎないからだ。ヘミングウェイも当然、当時のアメリカを席卷していた帝国の欲望から無縁でいられたはずもなく、そういった時代の制約から自由になることはできなかったはずである。

たしかにロバート・W・ルイスの言うように、ヘミングウェイはいくつかの作品で常套的なステレオタイプのインディアン像を破壊している。「原始的自然に住む勇氣と忍耐を持った高貴なる理想像からはほど遠く、実際のインディアンたちは他の誰とも違わない男や女たちであり、そのなかの個々人は悲鳴を上げたり笑ったり絶望して死んでしまったりするのである」[Lewis: 202-203]。しかしエイミー・ストロングが指摘するように、「インディアン・キャンプ」のインディアンたちは「個々人」とはどうも言いがたい。「医師と医師の妻」でアダムズ医師をやりこめた混血のインディアン、ディック・ボウルトンなどと比べれば、この作品でのインディアンたちは無名の存在であり、その表情も描かれず、悲鳴や笑い声を除いては声すら持たないのである。

白人たちに支配されるインディアンを同情的に描く「インディアン・キャンプ」において、いったいなぜ彼らは

声を持たないのか。それはひとつには実際に彼らが声を奪われていたという現実を反映しているのだろう。当時の西洋文化において、インディアンたちは常に表象される存在でしかなく、西洋のまなざしの客体でしかなかった。つまり「インディアン・キャンペーン」は当時の白人によるネイティブ・アメリカン搾取の現実をそのまま映し出しているのである。しかしこの作品がいかにネイティブ・アメリカンに同情を誘ったとしても、白人／ネイティブ・アメリカンの支配構造はそのまま維持されてしまう。ネイティブ・アメリカンが言葉を持たない以上、読者は西洋の価値観の中で、西洋のまなざしを通してしか彼らを見ることができないのである。

しかし、だからといってこの作品を単に帝国の欲望を体现した作品であると断罪するわけにもいかない。我々にとって重要なことは、マイヤーズのように作品を帝国主義的イデオロギーに回収してしまうことではなく、たとえわずかでもそのイデオロギーへの抵抗の可能性を見いだすことである。つまりアダムズ医師のインディアン女性に対する姿勢の中に、単に医師の個人的人種偏見だけではなく、その裏側に潜む麻酔の認識論を見だし、それに批判を加えることこそが重要なのである。

註

¹ 本文では「ネイティブ・アメリカン」と呼ぶが、作品中では「インディアン」と言及されているので、作中人物をさして言うときには本文でもそれにならうこととする。

² マシュー・スチュアートは、「インディアン・キャンペーン」はこの本『『我らの時代』の最高の作品のひとつである。物語の中心にある謎を決して説くことができないという点がその大きな理由である』と述べている[Stewart: 38]。

³ 「一般的に啓蒙思想家たちは原始主義について述べる際、自然の中の未開人たちが痛みを感じないことを賞讃した。未開人たちは「過敏な」ヨーロッパ人種がかかる病や神経の障害とは無縁であるとされていた。こうして自分たちの感じる痛みはむしろ特殊なものだという白人たちの信念は、知識人旅行者や素人人類学者たちが広く世間に公表していた観察記によって追認されることとなった。一九世紀米国の有名な神経学者S・ウィア・ミツチェルは、「我々は文明化される課程で、苦しむための能力を高められたのだ。未開人たちは我々のように痛みを感じたりしないのだ」と書いている」[Morris: 39]。

⁴ ウォルドホーンも論の趣旨は異なるが、同様の結論に達している。「ニックは」自然の中から再生の感覚と安心感とをつみあげたのだ」[Waldhorn: 54-55]。

引用文献

- Bell, Michael. *Primitivism*. London: Methuen, 1972.
- DeFalco, Joseph. *The Hero in Hemingway's Short Stories*. Pittsburgh: U of Pittsburgh P, 1963.
- Griffin, Peter. *Less Than a Treason: Hemingway in Paris*. NY: Oxford UP, 1990.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigia Edition*. NY: Scribner's, 1998.
- Kern, Stephen. *Anatomy and Destiny: A Cultural History of the Human Body*. Indianapolis: The Bobbs-Merrill Company, 1975.
- Lewis, Robert W. "‘Long Time Ago Good, Now No Good’: Hemingway’s Indian Stories." *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Ed. Jackson J. Benson. Durham: Duke UP, 1990. 200-12.
- Meyers, Jeffrey. "Hemingway’s Primitivism and ‘Indian Camp.’" *Twentieth Century Literature* 34.2 (Summer 1988):

- 211-222.
- Monteiro, George. "The Limits of Professionalism: A Sociological Approach to Faulkner, Fitzgerald and Hemingway." *Criticism: A Quarterly for Literature and the Arts* 15.2 (Spring 1973): 145-55.
- Morris, David B. *The Culture of Pain*. Berkeley: U of California P, 1991.
- Morse, Janice M. and Carl Mitcham. "Compathy: The Contagion of Physical Distress." *Journal of Advanced Nursing* 26 (1997): 649-57.
- Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: G. K. Hall, 1989.
- Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Lincoln: U of Nebraska P, 1995.
- Stewart, Matthew. *Modernism and Tradition in Ernest Hemingway's In Our Time: A Guide for Students and Readers*. NY: Camden House, 2001.
- Strong, Amy Lovell. "Screaming Through Silence: The Violence of Race in 'The Doctor and the Doctor's Wife' and 'Indian Camp.'" *Hemingway Review* 16.1 (Fall 1996): 18-32.
- Waldhorn, Arthur. *A Reader's Guide to Ernest Hemingway*. NY: Farrar, 1972.
- Warren, Edward. *Some Account of the Lethaeon: or Who Was the Discoverer?* 2nd ed. Boston: Dutton and Wentworth, 1847.
- Wertz, Richard W. and Dorothy C. Wertz. *Lyings-In: A History of Childbirth in America*. New Haven: Yale UP, 1989.
- White, Hayden. "The Forms of Wildness: Archaeology of an Idea." *Topics of Discourse: Essays in Cultural Criticism*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1978. 150-82.
- Wolter Jürgen C. "Caesareans in an Indian Camp." *The Hemingway Review* 13.1 (Fall 1993): 92-94.